二〇二二年九月九日

ひぐらしの間遠となりて夕日落つ　もとこ
推敲に推敲せよと法師蝉　せつ子
女王逝く大虹かかる宮殿へ　千鶴
わが前を蝶のいざなふ花野径　澄子
秋霖や逝きし夫の男傘　むべ
鎌捨ててすくむ翁や秋の雷　素秀
秋灯し鞍馬の里の小糠雨　あひる
時化の日は沖見るばかり秋団扇　ひのと
ゆつくりと水車吐き出す秋の水　宏虎

二〇二二年九月八日

イヤホンの片耳はずす虫の夜　なつき
青栗を蹴つて競ふや下校道　かえる
刈り入れの済みし畦道捨案山子　みきお
草野球とんぼと共に盗塁す　満天
釣り銭を両手で受くる秋祭　ひのと
雲裂けて隠沼に射す秋日かな　素秀
早起きの子が数へみる牽牛花　あひる
沿道に飛び火の如く曼珠沙華　澄子

二〇二二年九月七日

帯となり白衣となりて山の霧　たか子
風渡る尾根の細道吾亦紅　智恵子
舟ひとつ浮かべて湖の澄めりけり　ひのと
青柿の顔のぞきをる葉かげかな　あひる

二〇二二年九月六日

砲台の残る島影鳥雲に　みきお
出羽三山ななめに仰ぐ案山子かな　ひのと
成人の吾子と楽しむ夜長酒　もとこ
木立抜け秋麗の富士あらたなり　澄子
秋あざみ挿して職員室の窓　あひる
荒海の如く波打つ稲穂かな　千鶴
山頂にパゴダの白き霧の町　素秀
ひと日終へ老には長し秋の夜　ふさこ

二〇二二年九月五日

鎌を引く花かたばみを避けもして　あひる
台風の魁カーテン揺れ通し　こすもす
駅長の奏づるピアノ星月夜　ひのと
遠山を越え迫りくる野分雲　せいじ
折りとれば露の重さの蛍草　素秀
叡山に谺すごとく法師蝉　せいじ
爽やかや十七文字が吾を呼ぶ　たか子

二〇二二年九月四日

澄む川面遡るやに白き雲　満天
朝月や海より明くる漁師町　ひのと
離れへの足をとめたる秋海棠　明日香
来し方や受洗記念の九月来ぬ　せいじ
竜胆にひと息つきて山の道　あひる

二〇二二年九月三日

満たさるる故に募りし秋思かな　明日香
小流れに誘はれ散る桐一葉　智恵子
高牧の起伏に群るる夕蜻蛉　せいじ
石蹴りの石持ちかへる秋の暮　ひのと
地鎮祭終へし更地へ月さやか　ひのと

毎日句会みのる選・二〇二二年九月一一日